

こどもとの対話

小児看護におけるコミュニケーションの重要性

特集にあたって

こどもとの対話と看護

私たちは臨床のなかで、こどもとたくさんコミュニケーションしています。もともと、コミュニケーションということばの語源は、「分かち合う」「共有する」というラテン語です。つまりコミュニケーションは、何か情報を伝えたりたずねたりする一方のものではなく、「伝えた」「伝わった」という双方向でないと成り立たないものです。

看護師は、日々こどもに状態をたずねたり、検査や処置の予定を伝えたり、さまざまな説明をしたりしています。ただ、たくさんの業務のなかで、看護師が欲しい情報や伝えたい情報があるためのかかわりにとどまってしまうこともあるかもしれません。また、こどもが発しているさまざまなサインをとらえ、こどもが安楽になるようにケアを提供する場面で、私たちはこどもとのコミュニケーションをどのように意識しているのでしょうか。情報のやりとりという意味で考えると、処置や清拭などのケア場면을コミュニケーションとしてあまり意識しないかもしれません。ですが、こどものサインを受け取り、それに応えるというやりとりがあり、そこには「コミュニケーション」「対話」が存在すると考えます。

こどもは、親や友達、大人との「対話」を通して、自分を表現したり、表現することを学んだりしながら成長・発達しています。こどもにとって看護師とのコミュニケーションは単なる情報の共有だけでなく、こども自身が伝えたいという主体性を育むことにつながったり、「伝わった」「楽になった」と感じることで、こどもにとっての癒やしになったりするものです。そのようなこどもとの「対話」こそ、“看護”そのものではないかと考えます。

そこで本特集は、こどもとかがわる際のスキルや情報のやりとりを超えて、コミュニケーションをとらえ、こどもとの「対話」、つまり、“看護”そのものであることを考える機会になればと思い企画しました。知っておきたい知識として、こどものことばの発達、コミュニケーションや対話について、相互作用する母子の対話、コミュニケーションに影響するこどもの心理面や遊び、協働意思決定 (shared decision-making) に関することを、看護師だけでなく幼児教育や心理、チャイルド・ライフ・スペシャリストの方々に執筆をお願いしました。また、小児看護ではさまざまな発達段階にあるこどもたちを対象としますので、幼児期、学童期、そして思春期のこどもたちとの対話について、処置やセルフケアを支援する場面などを通し看護の実際を含めて紹介していただくようにしました。ことばや認知的発達など、こどもの特性や病気にあるこども、そして家族との対話やこどもや家族を支援するための看護師と多職種チームとの対話についても、研究成果や臨床経験を含めてご執筆いただいています。加えて、家族が医療者との対話をどのように認識しているかについて、ご遺族に執筆をお願いいたしました。

読者の方々が、日常のケア場面でのこどもとのかかわりを振り返り、コミュニケーションの重要性を再確認し、もっとこどもと「対話」したいと感じられるような企画になれば幸いです。

松岡真里 Matsuoka Mari

三重大学大学院医学系研究科看護学専攻
生涯発達看護学講座小児看護学分野教授／
小児看護専門看護師